

日本IT書紀

053 大陸

04 含牙篇
卷之七 乾坤

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第五十三

大陸

一

日本ワットソン統計会計機械株式会社が活動を開始したのは二・二六事件の翌年、一九三七年だった。この国が軍国主義に大きく転換したときに、自由・平等を標榜する国の最新機械装置メーカーが始動したのは皮肉な回り合せだった。

軍国主義が顕在化した事象の第一歩は、この年の一月、廣田弘毅内閣が瓦解したことだった。引き金となったのは陸軍大臣・寺内寿一のゴリ押しである。

第七十回帝国議会で立憲政友会の衆議院議員（前議衆院議長）浜田国松が二・二六事件以降の軍部の政治干渉を批判する演説を行った。

これに対して寺内が
——軍人を侮辱している。

と反駁した。

浜田が

——速記録を調べて私が軍を侮辱する言葉があるなら割腹して君に謝罪する。なかつたら君が割腹せよ。

と激しく寺内に詰め寄り、寺内が壇上から浜田を睨みつける事態となった。憲政史上に残る「腹切り問答」である。

このあと寺内は廣田首相に

——政党は時局の認識が甘い。

と議会の解散を要求した

議會を解散する・しないは首相（閣議）の専権事項という昨今の常識に従えば、廣田は寺内を罷免すればよかったところが大本国憲法に

「天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス」

とあって、首相といえども陸海軍の人事に口を挟むことができなかった。

しかし議會を解散する大義がない。となると寺内は従わない。つまり廣田の選択肢は内閣総辞職しかなかった。

後任に指名されたのは宇垣一成だった。寺内の九歳年長で、長州閥の流れを組む宇垣派の頭目である。かつ、予備役編入を忌避する寺内の希望を叶えたことがあった。元老・西園寺公望は寺内以下の陸軍主戦派を抑えることができると考えた。

ところが陸軍大臣が決まらなかった。というのは、陸軍大臣については三長官合意を必要とする慣例があった。だ

けでなく、宇垣の打診に小磯国昭（当時陸軍中將・朝鮮軍司令官、のち首相）が答えたように、

——東京に向かう途中で『予備役編入』の通知を受け取って無駄骨になる。

という奥の手があった。

宇垣は自分が陸相を兼任することも考えたが、前年五月に復活した

——軍部大臣は現役武官に限る。

とする制度が壁になった。軍部主導の政治を目指す参謀本部の石原莞爾（大佐）らが、前陸相の寺内寿一（大將）、教育総監の杉山元（大將）や憲兵司令官の中島今朝吾（中将）を巧みに操縦した。

それを受けて誕生した林銑十郎内閣は、外務・文部の二大臣を林が兼任するにわか仕立てだったし、組閣後百二十三日で総辞職に追い込まれた。結果として近衛文麿に落ち着いたのは、近衛が平民出身の政党内でも軍人でもなく、後陽成天皇十二世の孫、藤原摂関家という血脈にあるからだった。

政治的なならみ合いで二進も三進も行かなくなったとき、この国は体温を持つ人ではなく、人のかたちをした形代（かたしろ）を推戴することが少なくない。

人形（ひとがた）で「とりあえず休戦」するのだが、秀

吉が三法師を担いだのと同じように、近衛内閣は陸軍の傀儡になってしまった。これを機に、日本は戦争に突入していく。

その直後、七月七日に北京郊外約十キロの盧溝橋というところで、日中両軍が武力衝突する事件が勃発した。「盧溝橋事件」である。

次いで八月十三日、今度は上海で日中両軍が交戦状態に入った。近衛内閣が「中華民国政府断固膺懲」の声明を出して中国との全面戦争に突入したのは十五日である。

十一月に入ってドイツが日中和平工作に乗り出したが、交渉が始まった十二月、南京攻撃に当たっていた日本軍が長江河畔に停泊していた軍艦「バナー」号、「レディバード」号を砲撃する事件が発生した。日本の軍事行動は国際連盟でも批難決議の対象となっていたから、この一件で第三国を仲介役とする和平交渉は頓挫せざるを得なくなった。

日本軍は十二月十三日、当時の中国の首都である南京を占拠して当初の目的を達成した。しかし中国国民政府は首都を武漢に移して対日徹底抗戦の姿勢を崩さなかった。このとき日本政府が矛を収めていれば、後々の大きな不幸は避けることができたかもしれない。

だが南京占領軍が多数の中国人軍民や婦女子を暴行虐殺するという「南京事件」が発覚した。だけでなく、近衛内

閣は翌三八年一月十六日、

——国民政府を相手にせず。

として和平交渉を打ち切った。これによって事態は決定的になってしまふ。

「自由」と「民主」を標榜するアメリカ (A = America) を軸に、イギリス (B = Britain)、中国 (C = China)、オランダ (D = Dutch) の四カ国は結束を強め、対日共同戦線、いわゆる「A B C D包囲網」を形成していく。それは、九九%以上を海外に依存していた石油が入らなくなることの意味していた。

一九三八年四月一日、近衛内閣は「国家総動員法」を公布し、五日には「電力管理法」を制定して電力の国家管理を実現した。日本軍は二十四個師団を投入して総攻撃を続け、五月に徐州、十月に武漢と中国各地を占領していった。だが国民政府は首都を重慶に移してなおも徹底抗戦を継続した。

二

一九三八年、欧州ではアドルフ・ヒトラー率いるナチス・ドイツ軍が三月にオーストリアを併合、十月にチェコのスデーデン地方に進攻して、英仏との緊張感を高めてい

た。ヒトラーは強力な統率力のもとに軍隊を機械化し、文字通り「疾風怒濤」(Sturm und Drang) の勢いでなだれ込んだ。

ドイツでは「クリスタルナハト」と呼ばれるユダヤ人迫害が激化しており、ドイツと国境を接するオランダやフランス、スイスなどにはユダヤ人難民が大量に逃げ込んでいた。

六月には中国共産党の毛沢東が「持久戦論」を発表して対日抗戦の継続を訴え、七月にはアメリカが「同義的対日禁輸」を決定した。アメリカはこのころから、大洋をはさんだ東西二つの大陸の動き——ナチス・ドイツと大日本帝国の軍事的膨張——にどう対応すべきか、シミュレーションをスタートさせていた。

アメリカが取り組んでいたのは兵器の開発ばかりでなかった。

そう書くと、本稿の本旨から、

——ははくん、さては計算機だな。

と推測する向きがあるかもしれないが実はそうではない。

I B M社が陸軍に計算機の活用を提案するのは一九四〇年の七月だし、陸軍がペンシルベニア大学のムーア・スクールと砲弾彈道計算用の計算機開発にかかる契約を結ぶのは一九四三年六月である。

連邦政府も軍も、一九三七年・三八年の時点では計算機に思いが至っていなかった。彼らが着目したのは計数的経営手法、つまりランチェスターの法則だった。その背景には、いずれ勃発するかもしれない世界規模の戦争では（かわらざるを得なくなるとして、だが）、大規模なプロジエクトを運営する手法を採用すべきだ、という考えがあった。戦争を数値化しようというのである。

この話を聞いたら、当時のナチス・ドイツ関係者は

——数式で戦争ができるか。

と鼻で笑ったに違いない。

まして大日本帝国の軍関係者は

——精神がなつたらん。

と怒鳴ったかもしれない。

実際、翌三九年の二月、平沼騏一郎内閣は「国民精神総動員強化方策」を決定した。国民を総動員して対英米戦争に当たる準備を進める、というわけだった。

二月には早速、「鉄製不急品」の回収を開始した。寺院の鐘や台所の鍋釜が消えていった。これをきっかけに、巷間では「大東亜共栄圏」の言葉が頻繁に使われるようになっていく。

五月十一日、ノモンハンで勃発した日ソ軍の衝突で、日本帝国陸軍第二十三師団の東支隊が壊滅した。のちという

「第一次ノモンハン事件」である。

戦いは日本軍にとって初めて戦車対戦車の草原戦となったが、精銳を誇った関東軍の安岡戦車支隊はあつけなく壊滅し、歩兵部隊もソ連機甲師団の前に太刀打ちできないことが判明した。特に戦車は優劣の差が極端だった。

ただ一つ、優位であることが確認できたのは航空機だった。

同年五月二十日から月末までの戦いで、日本の航空機は攻撃してきたソ連軍機のうち五十九機を撃墜して損失ゼロ、六月二十二日にはソ連軍の百五十機との空中戦で四機を失ったものの撃墜五十六、さらに二十六日までに撃墜八十八を記録している。

このときソ連極東軍が保有していた航空機は約二千機、対して日本は三百四十機だった。質が数を制した。

優秀な航空戦力は、飛行兵の錬度と航空機そのものの性能によっていた。

満州で活躍したのは中島飛行機の「九七式戦機」（中島キー27）である。また、三菱重工業の名古屋航空機製作所（名航）では、海軍から発注された次期主力戦闘機が完成しつつあった。

その年の七月、名航の堀越二郎が九二年の年月を費やし

て設計した海軍零式艦上戦闘機（零戦）の試験飛行が行われ、最高速度五百キロ／時という当時の戦闘用航空機としては最高記録を樹立していた。ちなみに「零式」は、海軍に制式採用された一九四〇年が皇紀二千六百年に当たっていたため、末尾の「〇」を取って名付けられた。

同じ月に日米通商航海条約の破棄が決まった。九月にはドイツがポーランドに侵攻して第二次世界大戦の欧州戦線が火蓋を切り、日本では「贅沢品は敵だ！」の合言葉のもとで、米、砂糖、マツチ、ガソリンなどの販売・使用が規制されていた。

戦時体制の強化を受けて、民間では輸入品の排斥が激化した。丸善や黒澤商店、関東大震災のあと黒澤商店からのれん分けで独立した日本事務器商会（のち日本事務器）といった輸入事務機器の販売会社は、国産化に移行せざるを得なかった。

日本事務器商会は内紛もあって一九三二年に分裂し、創業者の田中啓次郎は代表者の座を降りていた。田中はこのために東京・荻窪の私邸を抵当に入れて資金を工面したが、それでもなお五万円の借金が残っていた。

田中は日本事務器商会から離れ、くろがね工作所（大阪市西区）社長の三村小太郎の支援を受けながら、帳簿型ビジュアルレコーダー（カード式情報記録装置）「バイコ」の

開発に成功した。事務機器の輸入が激減したことが幸いして、「バイコ」は増産に次ぐ増産となった。当初の販売目標は月間三百台だったが、一九四一年には年五万台を販売したという。陸海軍の工廠が大口取引先だった。

三

排斥されたのは製品だけではなかった。

外来語、特に英語が目の敵になった。

明治期に欧米から輸入された文化は、例えば正岡子規がベースボールを「野球」と翻訳するなど「日本化」されていた。ちなみに現在、われわれが何気なく使っている文章の作法は、この人が生み出した。

維新以後も日本語の文章表現は旧態依然たる擬古文ないし漢文読下しの表現で行われていた。すなわちそれは旧体制の「家」を機軸とする思想の名残であって、日常に交わされる会話と大きく乖離していた。彼はそれを「日記」というかたちで打ち破った。誰もが自分の言葉で自分を表現する手法が提示され、庶民が

——私は……。

で語り始めた。それが「自我」というものを育んだ。夏目漱石『坊ちゃん』『我輩は猫である』、伊藤左千夫『野菊

の墓』、長塚節『土』等々は、すべてこの人から出た。

その子規は東京帝大時代、神田錦町の旧開成所跡にあったグラウンドで野球を楽しんだ。その際に編み出した用語が現在も使われている。ベース⇨「塁」、フライ⇨「飛球」、キャッチャー⇨「捕手」、ファール⇨「邪飛」、デッドボール⇨「死球」、ホームラン⇨「本塁打」、ヒット⇨「安打」、バッター⇨「打者」、ライト⇨「右翼手」、センター⇨「中堅手」、レフト⇨「左翼手」、ショート⇨「遊撃手」……。

そこには知恵とセンスがあった。

ところが戦時体制下で起こった英語の排斥は、「アウト」を「ダメ」、「セーフ」を「ヨシ」と言い換える類で、知的センスがまったくなかった。暴力をもって文化を排斥するに等しかった。英語を使ったり、欧米の事情に詳しいというだけで、白眼視する風潮が蔓延し始めた。

アメリカを敵視する風潮は産業界でも同様だった。

軍需動員に伴って、資本の鎖国が始まった。国内電子機器メーカーで唯一の日米合弁会社であった日本電気は、一九三七年十二月に資本金を一千二百五十万円から三千万円に増資して、米インターナショナル・スタンダード・エレクトロニクス（ISE）社の保有株式比率を三六・九%に下げた。さらに四一年八月に再度、資本金を五千万円に増資して、ISE社の出資比率を一九・七%に下げるとともに、

住友グループが四六・一%を占めるようになった。

四一年十二月八日のインドシナ攻撃と真珠湾攻撃で、ついに米英蘭三国との戦争に突入すると、日本政府は同月二十三日、「敵産管理法」を公布・施行した。これによってISE社の保有する日本電気株は凍結され、日本電気は完全に住友本社の統括下におかれることになった。

翌四二年二月、社名を「住友通信工業」に改め、全工場が軍需工場に指定された。同社は政府から電探（レーダー）の研究開発を指令されていたが、四一年六月に川崎市生田に研究所生田分室を開設している。同分室の跡地は、のちに専修大学生田キャンパスとなった。

また工場では無線通信機、電波探知機、高射砲用標定機、方向探知機、水中探音機など無線関連装置を生産した。一九四〇年度の生産高四千五百三十九万円のうち、軍需の比率は四三%だった。

これが四一年度になると五千四百八十七万円のうち六四%に跳ね上がり、四二年度は七千四百七十三万円のうち八〇%、四三年度は一億七千二百四十六万円のうち九四%、四四年度は三億二千四百六十八万円のうち九六%となっている（終戦直後、住友通信工業が連合国軍総司令部の経済科学局に提出した記録による）。

また、日本軍の展開に伴って、三七年十二月に「満州通

信機器株式会社」を設立したほか、四一年十二月に接收した「中国電気公司」の経営委託を受け、さらに四三年五月にはジャワ島バンドンにあったオランダ領インドネシア政府保有の無線研究所と付属工場の経営を委任され、これを「ジャワ無線機器製作所」と改称した。

ジャワ無線機器製作所は当初、現地日本軍の無線局や送信所の機械設備を修理・補給するだけだったが、やがて真空管や無線装置などを現地で生産するようになった。従業員は日本軍に降伏したオランダ人や現地人など一千三百五人、うち日本人は二十一人だった。

補注

廣田弘毅 ひろた・こうき／1878～1948。福岡市出身の外交官で、一九二六年オランダ公使、三〇年駐ソビエト連邦特命全權大使、三三年齋藤実内閣、三四年岡田啓介内閣で外務大臣を経て三六年三月内閣総理大臣となった。

寺内寿一 てらうち・ひさいち／1879～1946。東京府生まれ、東京府育ちだが山口県出身となっている。第十八代内閣総理大臣などを歴任した元陸軍大將寺内正毅の長男で、皇族以外では陸海軍を通して親子二代で元帥府に列せられた唯一の人物である。陸軍大臣在任時は、衛生省(厚生省、現・厚生労働省)の設立を提唱。太平洋戦争期には、編成時から一貫して南方戦線の陸軍部隊を統括する南方軍総司令官を務めた。

浜田国松 はまだ・くにまつ／1868～1939。一九〇四年(明治三十七)三重県郡部から衆議院議員となり以後十二回連続で当選した。甲辰俱樂部、政友俱樂部、猶興会、又新会を経て、一九一〇年(明治四十三)立憲国民党の結成に参加した。一九一七～一九二〇年衆議院副議長、一九三四～一九三六年衆議院議長を務めた。最後まで自由主義・反ファッショの姿勢を貫いた。

林銑十郎 はやし・せんじゅうろう／1876～1943。金沢市に生まれ一八九六年陸軍士官学校卒、一九〇三年陸軍大学校を出て日露戦争後、連隊長、旅団長、陸軍大学校長、教育総監部本部長、近衛師団長、三〇年朝鮮総督。三二年大將に進み、三四年岡田啓介内閣で陸相。このとき真崎甚三郎を陸軍教育総監から罷免し二・二六事件の遠因を作った。三七年首相となったが四か月

で辞任し 四二年大日本興亜同盟総裁。満州事変のとき一存で朝鮮軍を満州に越境させるなど何かと問題の多い軍人だった。

盧溝橋事件 一九三七年七月七日夜、北平(北京)郊外の豊台に駐屯していた支那駐屯歩兵第一聯隊第三大隊第八中隊の将兵が盧溝橋付近の河原で夜間演習中、実弾を撃ち込まれ、点呼時に兵士の一人が所在不明だったため、中国側の攻撃があったと判断して起きたと言われる。比較的小規模な戦闘が繰り返された後、九日には中国側からの申し入れにより一時停戦状態となった(Wikipedia「盧溝橋事件」)。

行方不明とされた兵卒は志村菊次郎という初年二等兵だった。このとき伝令を務めていた彼は「第一小隊に戻ろうとしたが方向を失ってしまった」と後述している。のちビルマ戦線で戦死した。

日本の支那駐屯歩兵第一連隊が首謀者と目した宗哲元はこのとき北京に赴いていて事件のことを知らされ大いに慌てた。長く真犯人は不明とされてきたが、のち中国共産党が劉少奇(Liu Xiaoping)／1898～1969)とその一派が行ったことを正式に認めた。

宗哲元 Song Zheyuan／そう・てつげん／1885～1940。盧溝橋事件のとき、国民政府軍第二十九軍長だった。三二年察哈爾省政府主席、三五年冀察政務委員会委員長を経て三七年に第一戦区副司令長官兼第一集團軍総司令となった。しかし病のため三八年退役し、そのまま病没した。死後「第一級上將」の位を贈られた。

パネー号 日本軍の侵攻から在中國アメリカ人を保護する目的で南京から五十キロほど離れた揚子江岸に停泊していたアメリカ砲艦で、日本軍が誤って砲撃し沈没させた。艦長はのちに太平洋艦

隊を指揮したスプルーアンスだった。

南京事件 中国では「南京大屠殺」、欧米では「Nanking Atrocities」
 「Rape of Nanking」と呼ばれた。

一九三七年十二月十三日、中国国民政府の首都南京市を占領した日本帝国陸軍の第十軍が六週間にわたって掃討作戦を展開した。その際、多数の中国軍捕虜、敗残兵、便衣兵及び非武装市民を不法に殺害したとされる。大日本帝国陸軍は移動中に上海、蘇州、無錫、嘉興、杭州、紹興、常州などでも捕虜や市民への虐殺と略奪を続けていた。欧米ではシカゴ・デイリー・ニュースやニューヨークタイムズ、中国では大公報などが現地情報として報道しており、当時から国際的な非難が集中した。

欧米報道機関が用いた写真の中には南京事件と関係のないものや実態と異なる作爲的なものが混入している。しかし南京事件そのものが欧米報道機関や軍関係者および、中国共産党などによって捏造されたことにはならない。軍刀の試し斬りや婦女暴行、嗜虐的な拷問、大量殺戮などが行われたことは否定できない。

アドルフ・ヒトラー Adolf Hitler / 1889 ~ 1945。オーストリアのブラウナウに税関吏の子として生まれた。一九一三年オーストリア・ハンガリー帝国の兵役を逃れるためミュンヘンに移住し、第一次世界大戦にはドイツ帝国の志願兵として参加した。軍隊での階級は伍長で留まった。対ロシア戦線で使用された毒ガスによる負傷で視力は回復したものの声は元に戻らなかった。

このうち「ドイツ労働者党」に参加し独裁を認めるよう党綱領を改変し、党名を「国家社会主義ドイツ労働者党」と改めて二一年党首となった。イタリア・ファシスタ党ムッソリーニに憧れ武装蜂起を画策したが失敗、それを機に平和的政権奪取に転換し三

二年大統領選挙に出馬した。この選挙には敗れたが続く総選挙で第一党に躍進、ヒンデンブルク大統領はやむなく三三年ヒトラーを首相に任命した。

三三年三月「全権委任法」を制定、翌三四年六月軍事クーデターで政敵を一掃して独裁体制を固め三九年ポーランドに侵攻して第二次大戦の口火を切った。四〇年七月国防軍最高司令官に就任し戦争最高指導者となったがロンメルをはじめとする軍人にとつては「たかが伍長」に過ぎなかった。対ソ戦に失敗し連合国軍のノルマンディ上陸を許して以後は軍部のクーデターを恐れつつ、空想的な「革命的新兵器」に一縷の望みを託した。原子爆弾はその中の一つだった。

四四年七月クラウス・シエンク・フォン・シユタウフェンベルクによる暗殺未遂事件で数人の側近が死亡したがヒトラーは奇的に無傷だった。四五年三月「ドイツは世界の支配者たりえなかった。ドイツ国民は栄光に値しない以上、滅び去る他ない」と述べ、全土を焦土化する「ネロ指令」を出したが軍需相アルベルト・シユペーアによって回避された。同年四月三十日愛人エヴァ・ブラウンと結婚し、翌日、総統官邸地下壕で妻エヴァと共に自殺した。

ズデーデン チェコの北部の総称で、第二次大戦前、ここに多数のドイツ人が居住していた。ナチス・ドイツが近隣諸国に侵攻する口実として、列強によるズデーデン進出容認が利用された。

疾風怒濤 シュトルム・ウント・ドラング。ローマン主義に対してシラー（一七五九～一八〇五）、ゲーテ（一七四九～一八三三）などが提唱した民族主義的思想で、ナチス・ドイツの思想的標語となった。

平沼騏一郎 ひらぬま・きいちろう／1867～1952。岡山県に生まれ一八八八年帝国大学(のち東京帝国大学)を出て司法省に入った。一九〇七年大逆事件の捜査を指導し二三年検事総長、一四年シーメンス事件の捜査を指揮して二三年山本権兵衛内閣で法相。西園寺公望とは犬猿の仲で、何度も首相候補とされながら組閣することがなかった。西園寺の影響力が薄れた三九年首相となったが日独防共協定と矛盾する独ソ不可侵条約にあつて「複雑怪奇」の言葉を残して辞任した。ポツダム宣言受諾に最後まで反対し、戦後A級戦犯として巢鴨拘留所に拘留、四八年終身刑の判決を受けたが五二年仮出所、ややあつて病死した。

ムーア・スクール Moore School of Electrical Engineering: アルフレッド・フィトラー・ムーア (Alfred Fitter Moore) の寄付で一九二三年六月に設立され、ペンシルベニア大学から電気工学部として認定された。ここで教員を務めていたジョン・モークリー (John William Mauchly / 1907～1980) とジョン・プレスパー・エッカート (John Adam Presper Eckert Jr. / 1919～1995) がENIAC, EDVACを開発した。のちペンシルベニア大学工学部に統合された。

第一次ノモンハン事件 外モンゴル軍総司令官チヨイバルサン元帥は三九年五月十五日ごろ、第六騎兵師団をハルハ河に進出させた。同時にソ連第五十七狙撃軍団も同地に結集し、日本帝国陸軍東支隊が撤収した後の東岸に陣地を構築した。これに対して帝国陸軍第二十三師団は歩兵第六十四連隊の山縣支隊に出勤を命令、飛行隊も増強して五月二十八日攻撃を開始した。東支隊は側面攻撃に向かったが、ソ連・モンゴル連合軍はハルハ河西岸台上から砲兵射撃で反撃した。結果として東支隊は戦車隊を伴うソ連軍歩

兵部隊に包囲され孤立し、出動兵力の半数が戦死、死傷六三%の大損害を受けた。山縣支隊は師団司令部の命令により五月三十一日に戦場を離脱し、ソ連・モンゴル軍もハルハ河西岸に後退したため、戦いは収束した。

戦車の優劣 日本陸軍は戦車を「歩兵部隊を支援する補助的兵器」と捉え小回りが利く短砲・小口径と薄い装甲で装備した。対してソ連軍はヨーロッパ大陸での機械化戦闘に備え、長砲・大口徑で厚い装甲を備えた重戦車を開発した。装甲に使った鋼板の製造技術も優劣がはっきりしていた。のちに満州の戦車隊整備兵だった福田定一(1923～1996、筆名:司馬遼太郎)は、「日本の戦車はヤスリでこすると削れるほど装甲が軟らかかった」と述懐している。

中島飛行機 海軍機関大尉だった中島知久平(なかじま・ちくへい/1884～1949)が一九一七年に創業した。試作機がなかなか飛ばないので「さつはだぶつくお米はあがる／何でもあがる／あがらないぞい中島飛行機」などと揶揄された。のち三井物産と提携して陸軍から飛行機の設計・製造を受注し、第二次大戦では陸軍の主力戦闘機「隼」を生み出した。現在の富士重工の前身。

九七式戦闘機 一九三五年末、日本陸軍が中国大陸での戦闘用に発注した。単座式で全幅十一・三メートル、全長七・五三メートル、総重量一七九〇キログラム、最大速度四六〇キロメートル／時、七・七ミリ機銃二基を装備し、草原や荒地での離着陸を考慮してスパッツ型固定脚を採用していた。一九四二年までに三千三百八十六機が生産された。

堀越二郎 ほりこし・じろう／1903～1982。群馬県に生

まれ東京帝国大学を出て三菱重工業名古屋航空機製作所に入った。ドイツのユンカース社に留学して航空機設計を学び、「九六式艦上戦闘機」「零式戦闘機」「雷電」「烈風」などの設計を担当した。第二次大戦後は在日アメリカ軍立川基地技術顧問を経て東京大学宇宙研究所講師、防衛大学校教授などを務めた。

零式艦上戦闘機 「零戦」「ゼロ戦」とも。制式採用された一九四〇年が皇紀(神武即位年の元年とする年紀)二千六百年に当たり、皇紀の下二桁を取るというルールから「零式」となった。九六式艦上戦闘機の後継機として投入され、日中戦争から太平洋戦争全期に量産された。一千馬力のエンジン「栄」を搭載し、二十ミリ機銃二門、無線電話・電信機を装備した。航続距離三千キロ、最高速度五百キロ/時、急降下耐久速度七百四十・八キロ/時を達成した。一九三九年四月一日陸軍各務腹飛行場(岐阜県)で初飛行してから一九四五年八月十五日まで、一万四百三十機が生産されたとされている。

田中啓次郎 たなか・けいじろう/1891~1981。新潟県に生まれ一九一六年早稲田大学を出て黒澤貞次郎商店に入った。一九二一年支配人となったが関東震災のあと独立して日本事務器商會を設立した。輸入事務機器の販売ばかりでなく独自開発の情報記録管理装置を開発した。第二次大戦後、株式会社に改組し六一年日本電気と共同で小型電子計算機の開発に着手し、のちの「オフコン」の基礎を作った。六八年勲四等瑞宝章。

日本IT書紀 053 大陸

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会

<http://www.ossaj.org/>

info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。